

人・ひのきしん 生・記

「音訳」② その②



「みんな生き生きと取り組んでくれることがうれしくて」。この日、小菅さん（中央）はメンバーと共に音訳の音声データを編集した（大東市内で）

この「声」を 待つ人がいる

「な」 るほど、これは便利ね」
「ここは、もっとこうしたほうが……」

大阪府大東市の「総合福祉センター」。ここで、小菅ちよ（69歳・日淀分教会長夫人・同市）が相談役を務める朗読ボランティアグループ「ともしび」の集まりが持たれた。

この日は、メンバー6人で、音声データを編集するパソコンソフトの使い方の習得に励む。

「皆が意見を出し合って、より良い物を作ろうとしてくれる。生き生きとしたメンバーの姿を見るのが、いつも楽しみで」と研修の様子を見ながら、小菅は目を細める。

音訳との出会いは、35年ほど前。教会の御用や育児の合間に「何か、より多くの人のお役に立つことができれば」と、地元の市民グループが行っていた朗読ボランティアに参加したことがきっかけ。親里での講習会へも通い、技術を磨いた。

昭和57年、グループの代表になった。おちばで、ある講師に「地域で後進の育成に力を注いでもらいたい」と言われたことが、小菅の背中を押した。

当初は、ボランティアメンバーとの意識の違いに、戸惑うことも多かったという。

あるとき、活動を休みがちだったメンバーの一人に何げなく尋ねた。「どうして音訳を？」。返ってきた答えは「キャリアアップのため」「世間への聞こえがいいと思って」。

「音訳は、自分を飾る`アクセサリー、じゃない。音声テープを心待ちにしておられる方々のために、目の見える私たちが、彼らの目の代わりをさせていただく。そのありがたさ、喜びを伝えたいと思った」

以来、折にふれて、たすけ合いの精神や「かしの・かりもの」の教えの一端を分かりやすく伝えてきた。体調が優れないメンバーには、朗読室でおさづけを取り次ぐこともある。

いま「ともしび」には、自らが提唱したスローガンが掲げられている。「何事もどうせやるならニコニコと明るく楽しく喜んで」。4年前に代表を引退し、相談役となってからも、このスローガンは引き継がれてきた。当初は数人だったメンバーも、40人に増えた。

「喜びをもってマイクに向かえば、声も自然と明るくなる。明るい声の音訳を聞けば、聞いた人の心も明るくなる。誰の目にもふれない`陰、のひのきしんかもしれないが、多くの人に`光、を届けられる喜びを、これからも伝えていきたい」

※天理時報 2013年7月28日号より。記事の内容等は掲載当時のものです。